

# 阿弥陀堂遺跡

福岡県朝倉郡宝珠山村・阿弥陀堂遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 64 集

1982 県教育委員会

1:25,000

500

500m

## 序

この報告書は、本年度、福岡県教育委員会が実施した文化財調査の一つであります。わが国中・近世文化研究の一資料として活用いただければ幸甚に存じます。なお、調査にあたっては、宝珠山村教育委員会及び同村文化財調査員各位の御協力に対し感謝の意を表します。

昭和57年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

## 例　　言

1. 本書は、県道栗林線新設に伴う阿弥陀堂遺跡緊急調査の概要報告書である。
2. 本書の執筆は、1, 3—(1)を宮小路が、2, 3—(2), 4, 5, 6を根来が執筆し、宮小路が編集した。
3. 掲載の写真撮影及び実測図の作成は調査担当者が行い、実測図のトレースは池辺が行った。  
また、摩崖宝篋印塔の拓影は、県立福岡農業高等学校主任主事加藤久嘉氏の手拓である。

## 目　　次

1. 調査の経過.....	1
2. 位置と環境.....	1
3. 摩崖宝篋印塔.....	2
(1) 規模と構造.....	2
(2) まとめ.....	3
4. 堂内の遺品.....	5
5. 境内の石造遺品.....	6

## 1. 調査の経過

当該阿弥陀堂遺跡の一部を通過する県道栗林線新設が計画されたことから、文化課は昭和56年7月1日、主任技師木下修を現地に派遣し、遺跡への影響の有無を調査した。遺跡は岩壁を背として平担部が造られ、阿弥陀堂が建っている。岩壁は南面していて、北寄りに宝篋印塔2基を半肉彫りした摩崖があり、これが工事によって破壊されることが判明した。遺跡は現在も村民の信仰の対象とされていることからも、現状での保存と止むを得ず破壊される場合は、摩崖の部分を切り取り保存するよう工事主体である福岡県土木部道路建設課及び福岡県甘木土木事務所と協議した。しかしながら、工法上現状での保存は不可能であるとの結果から、摩崖の部分切り取り保存と空間的記録保存の調査を実施することとなった。

調査は、前記道路建設課から調査費用の執行委任を受け、県教育委員会が昭和56年8月28日から9月3日の間に実施した。調査は、管理部文化課庶務係主任主事古賀秀幸、文化係技術主査根来昭仁、調査第一係長宮小路賀宏、調査第二係主任技師池辺元明が当った。

なお、宝珠山村教育委員会教育長室井昇・同社会教育係長田中兆の両氏及び同町文化財調査員梶原豊・高倉一三・熊谷正勝の各氏に種々と御協力いただいた。

## 2. 位置と環境

現在の朝倉郡宝珠山村は、旧宝珠山村・鼓村・福井村を合せた山村である。英彦山の南を水源とする宝珠山川が小石原から流れて来る大肥川に合流するあたりまで旧宝珠山村で、岩屋権現社、宝珠山氏の守城「鳥嶽城」が主な遺跡として残っている。国鉄日田彦山線の岩屋駅が旧村の北の中心となっているが、この岩屋駅の西北約1kmの高台は、400~500mの山地で、安山岩の集塊岩があり、多種多様の奇岩が、壮絶な自然美を構成している。県指定天然記念物であり、岩屋権現社がまつられている。

岩屋権現社は、「彦山流記」(鎌倉時代にかれた彦山の縁起書)にある彦山49窟の1つ宝珠山窟という山伏の修行窟を祠になしたもので、こゝに宝珠石という石があり、毎年蓮で石を包む祭事が伝えられている。村名のおこりになっているものである。奇岩が重なり修験靈場にふさわしい所で、彦山の山続きにあたり、江戸時代は宝満山系の一派に属していた。

鳥嶽城は、岩屋駅の東、標高315mの山城で、戦国期の宝珠山遠江守の守城と記録されている。宝珠山氏は大宰府の官人大蔵氏が土着した原田氏の流れをくむ土豪で、おそらく秋月氏に関係ある人々と考えられる。城跡には瓦等が出土するが、一族は後に黒田家に仕え、原氏と名乗っている。

今回の調査はこの鳥嶽城の南約500mのところに、阿弥陀堂と称する小祠があり、後の岩壁にレリーフの宝篋印塔が残されていた。

旧字名「アミダドウ」とあり、筑前続風土記の「阿弥陀堂觀音」とある記載に比することが出来る。現地名は宝珠山村大字宝珠山3695番地で、県道竹岩屋大行事停車場線の西側、井上光

広氏宅の裏にあたる。東側に宝珠山川が流れ、旧道はこの所から右におれ、鳥嶽城の城ノ辻に一直線にのび、そこから岩屋権現に向つている。付近には下雀区5軒の民家（以前は10軒あった）があり、この阿弥陀堂（現呼称大師堂）をまつる阿弥陀堂組の中心となっている。祭りは3月21日と8月21日の年2回、各家々から料理をもちより、僧を呼び読経し、会食をする簡単なものである。この地区には阿弥陀堂の他、塔の原・伽藍堂等の地名も残り、言い伝えでは宝珠山氏の家来の墓地であった所に阿弥陀堂を建て供養したとも言われる。前の川で大正の中頃まで、修験者が禊をしていたようで、岩屋修験の祭場でもあったことも考えられる。標高234mの高さにある。

現在の堂宇は昭和の初めに建てられた、東向きの2間四方の小祠で、奥の須弥壇に7体の石仏及び名号碑が安置されている。又境内には石仏7体・五輪塔4基、庚申塔等が残されている。

### 3. 摩崖宝篋印塔

#### (1) 規模と構造（第1・2図、図版3）

摩崖のある岩壁は、東面した南北方向の安山岩の岩壁である。阿弥陀堂はこの岩壁の前面を造成した平地に建てられている。境内地より山並み状にテラスが一段あり、この上部が岩壁となる。壁面は高2.3～5m、巾約18mで、阿弥陀堂の背後の壁面には斜めの亀裂があり、位置関係からこれが信仰の対象となったことが考えられる。

この亀裂の南側には、後述する「明治三十一歳 奉寄進 □月吉日 伊藤金郎」の奉納銘があり、反対の北側壁面下部に宝篋印塔が彫られている。

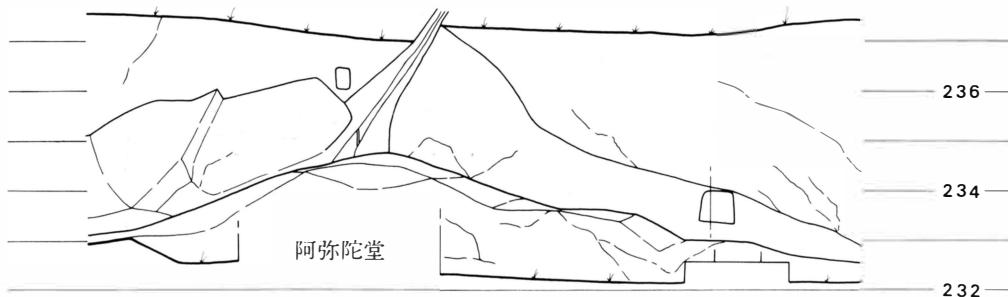
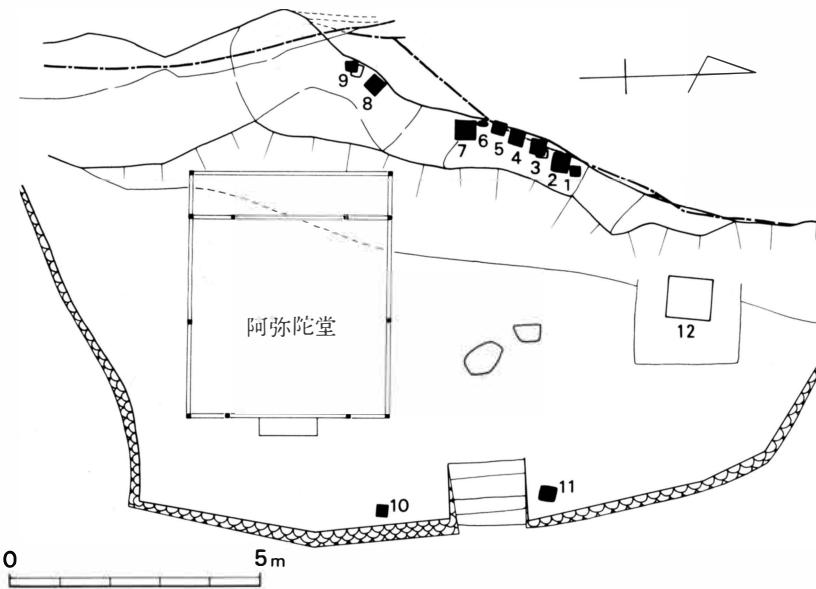
宝篋印塔のある部分は、壁面のやや出張った部分を選び、この出張りの上縁の基部を利用しながら溝を掘っている。これは壁面を流れる雨水等を受けて排水する溝で巾2cm、深さ1.5cmほどである。この排水溝下に宝篋印塔が彫られている。

下辺長80cm、上辺長70cm、左・右辺長各60cm、上辺で深さ8cmの方形枠を彫り込んだ内に1.5cmの厚さに2基の宝篋印塔が半肉彫りされている。下辺は壁面の下降と一致するために巾4mmの沈線で区画される。

宝篋印塔は、基礎、塔身、笠、相輪から成り、右（向って）の塔が若干大きく感じるが、これは笠の上辺の段が一段多く、なお、高さ及び巾が大きいためである。

隈飾突起は、両端が若干上方に上がる程度で、内に沈線による蕨手状の飾りがある。相輪の請花も素文であり、基礎にも格狭間等ではなく、簡潔な造りである。両塔の大きさは下表のとおりである。

区分 (cm)	総高	基礎		塔身		笠		相輪高
		高	巾	高	巾	高	巾	
左の塔	57.2	17.8	34.8	10.0	15.4	14.2	32.4	15.2
右の塔	58.5	18.0	34.6	8.4	16.6	17.0	34.2	15.1



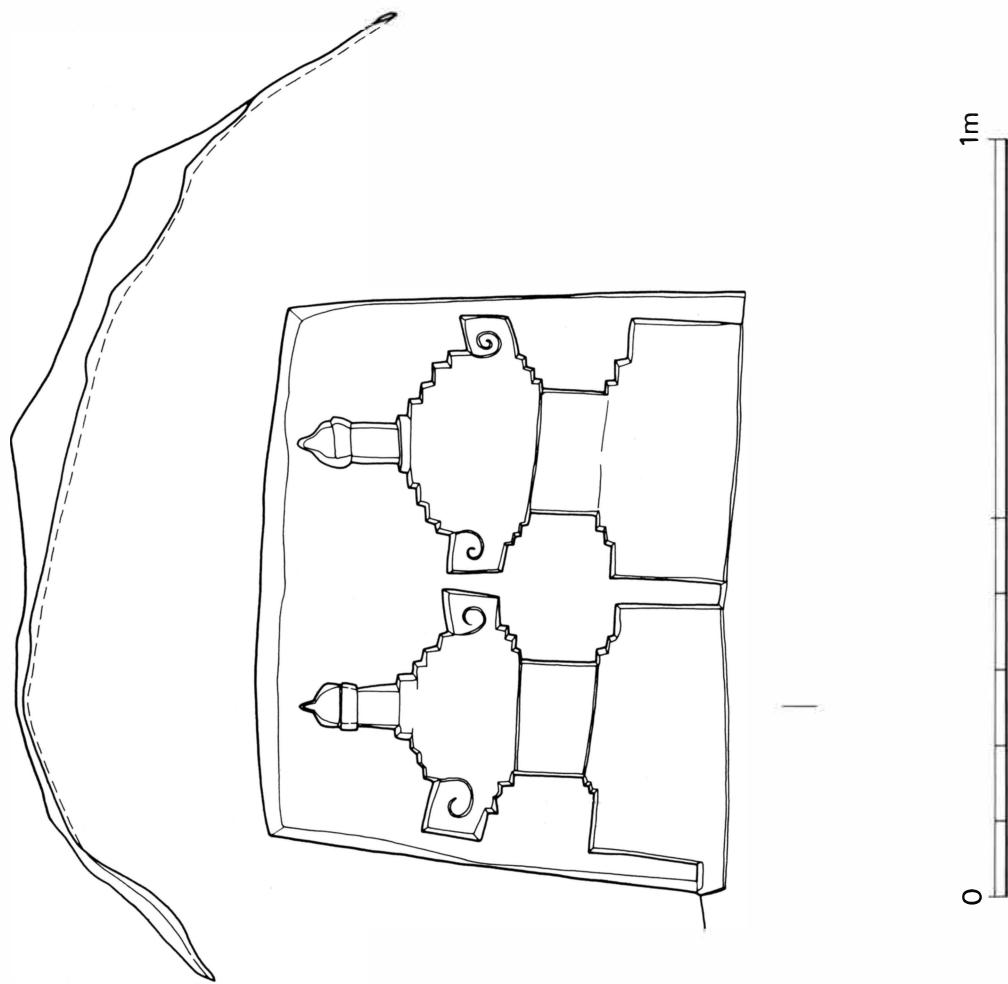
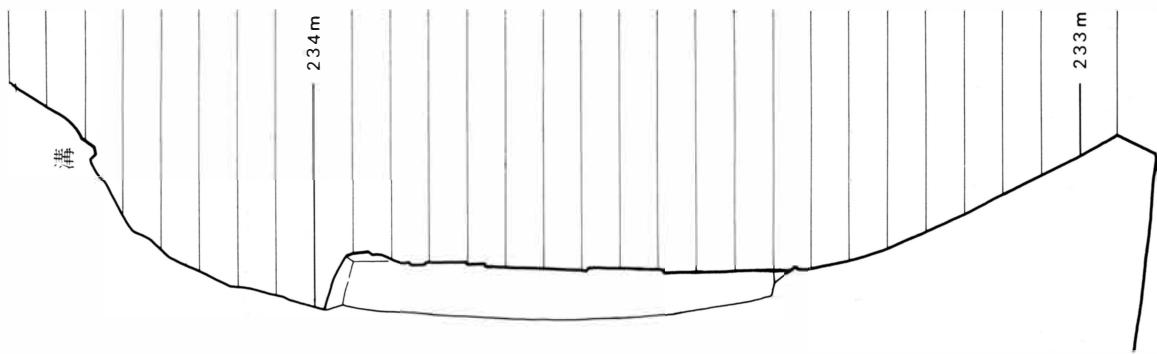
第1図 阿弥陀堂遺跡地形測量図

## (2)まとめ

一切の仏の舍利の功德をあつめた陀羅尼，つまり宝篋印陀羅尼経を納めた経塔，宝篋印塔は，日本では平安時代末期から造られてきた。

独特の形は良く知られており，立体の石造塔であることが普通である。

九州で古いものは，大分県臼杵市深田にある満月寺塔で，鎌倉時代に造られた古式の塔として有名である。県内で古いものは，福岡市東区志賀海神社境内に残る総高332cmの中央風の大きな塔であり，貞和3年（1347）の銘がある。豊前市求菩提山中にある塔は，笠の隅飾が内側に渦巻いた独特の様式をもち地方塔と知られており，南北朝期造立と推定されている。もう一例同じく南北朝と推定するものに，朝倉町南淋寺の小式頼尚供養塔・宗修禪尼遺髪塔と称する2塔がある。相輪・隅飾に欠損が多いが，相輪を受ける露盤が大きいのが特色であり，完形は



第2図 摩崖宝篋印塔実測図

少ないが県内でしばしば見受けられる（星野村等）。

塔が半肉に彫り出されたものは、当調査のものをふくめ3例が県内で確認されている。1つは、太宰府町觀世音寺脇に立つ玄昉供養塔で、98cmの自然石に塔を彫り出しており、鎌倉期造立と推定されてきた。塔身がやや丈長で、隅飾が三日月形に反っている。もう1例は、大野城山中の南斜面、太宰府町坂本の沢の最上部付近の岩盤に、3基の塔が並んで彫られている。高さが195cmあり、玄昉塔と同じように三日月形の隅飾で、「貞和2年（1346）……」の銘がある。

調査をした宝珠山塔は、基礎がやや大きく、二段階に上る。塔身は辺長で丈は低く、梵字等を刻んでいない。笠は下三段・上四段と上三段、につくり、細く短かい相輪をのせている。隅飾はやや横に張り出しており、上辺を斜めにカットした形にし、内部に渦巻を刻んでいる。基礎に返花がなく、相輪部の宝輪が短かい等が特徴として見られる。これに似た形式のものはないので、不明な所も多いが、玄昉塔・大野城塔とは別系統のものであると考える。隅飾内の渦巻は、周囲の輪廓を両側から持ちあげてきて、内側に巻き込む、求菩提型の造りを意識しているが、形式化している。塔身の極端に低い等もふくめ、浮彫りのために制約が多く、このような形になったものであろうが、全体に横に広がった姿、隅飾の外線が垂直に近い所等、古例を残している。南北朝期の末期頃14Cの終りか、15Cの始め頃の作品と推定される。

現在のところ推定の域を出ないが、今後県内からこのような摩崖塔が発見される可能性もあるので、今後を期待したい。おそらく修驗関係の遺品と思われ、数少ない貴重な文化財である。

#### 4. 堂内の遺品

阿弥陀堂の須弥壇に若干の石造仏及び堂内に絵馬等が残されている。江戸時代以後の新しいものであるが、この堂の信仰の推移を知る上に大切な資料であるので、簡単に紹介する。

##### ① 石造観音立像（図版6—1）

像高61cm、最大奥14cm、裾張18cm。凝灰岩で全身を造り、足部を枠として別材の蓮華座にさし込む。頭上に6面の顔を彫り出し、冠状に重ねてあり、おもしろい造りをしている。両手合掌状に合わせ蓮華を持つ。頭部破損のため、セメントで胸部に着す。背銘「久喜宮邑 都合彦右衛門正則」

##### ② 石造観音坐像（図版4—2）

像高31.5cm、幅23cm、奥行19cm。凝灰岩で全身を造り、髪部は墨で彩色、左手に蓮華を持ち、右手片手合掌印、衣は如来風に造っている。

##### ③ 石造地蔵菩薩坐像（図版5—1）

像高28cm、幅21.5cm、奥行17.5cm、凝灰岩。二手合掌し念珠をかける。厚手の裳を着している。

##### ④ 石造如来形立像

総高43cm, 像高28cm, 像幅13.5cm, 凝灰岩。舟形光背風に材を取り, 半肉彫に像を造る。円光背, 頭部は肉髻を作らず, 螺髪は打ちたゝいてつくる。両手とも上方にあげている。堂内像群のうちでも新しい作品(昭和か)。

⑤ 石造毘沙門天立像(図版4—1)

総高48cm, 像高42cm, 像幅18cm, 凝灰岩。舟形風の光背に本像を浮彫(半肉彫)する。頭部は鬚を結び, 右手で宝塔をかけ, 左手をそえている。脚部はわずかに下部を彫り出している。

⑥ 石造地蔵菩薩坐像(図版5—2)

像高28cm, 最大幅20cm, 奥行16cm。合掌し念珠をかける。③と同じ姿をしているが, 当像の方ができがよい。

⑦ 石造如来形立像(図版6—2)

像高63cm, 奥行20.5cm, 幅25cm, 凝灰岩。頭部は螺髪を墨で描く。両手定印に結び, 持物があった様であるが, どのようなものか不明。頭部はセメントで付けてあるが頭・身部は別体である。別材の四角石の台座に銘がある。「天文五天 南無阿弥陀仏 申 八月日 施主 上座郡宝珠山村中」

⑧ 絵馬 2枚

イ. 熊谷直実, 平敦盛合戦図(図版7—1)

63×27.5cm, 1枚板に岩絵具で, 騎馬武者2人, 松, 海波を描く。額に銘あり, 「奉納伊勢参拝記念, 昭和六年九月一日 井上国市」

ロ. 馬図(図版7—2)

50.5×42cm, 3枚の横板に馬一匹を描く。額銘「御願成就, 昭和十一年式月九日 井上角次」裏銘「御願成就, 昭和十一年式月九日 井上角次」

⑨ 名号碑(図版6—3)

高111.5cm, 幅24.5cm, 奥行15.5cm。凝灰岩の四角柱に矢研彫りで「南無阿弥陀仏」の名号を彫り, 蓮台の上に立つ。頂部はや・丸みをつけている。

⑩ 木製賽錢箱 2ヶ

イ. 幅41.5cm, 高9cm, 奥行20cm;

墨書銘 表「塞錢箱」

裏「昭和五年七月吉日, 阿弥陀堂, 下鶴・中尾・木屋組合中」

ロ. 幅32.5cm, 高20.5cm, 奥行18cm,

墨書銘 表「塞錢箱」

裏「阿弥陀堂 下鶴・中尾・木屋組合中」

5. 境内の石造遺品(第1図)

阿弥陀堂の裏側の岩盤(宝篋印塔を彫っている岩壁)が棚状にフラットになっている所に,

石仏・石塔の残欠がおかれている。又前面の階段の側にもあるが、ほとんどの物が、周辺から集められたと伝えられる。阿弥陀堂左下の宅地、右の墓地、川の対岸の伽藍堂跡などから寄せたものと思われ、時代、構成に統一したものは見あたらないが、一応紹介しておく。

① 塔残欠

下部から石燈籠（自然石）竿石・塔の台石・五輪塔火輪・五輪塔風空輪の4石を積み重ねて塔風に仕あげている。それぞれの石は別物。竿石に「元文五…南無…」「石燈籠」の銘がある。全高81cm。

② 地蔵菩薩立像

像高41.5cm、蓮台まで一石で造る立像で両手を組み宝珠を持つ。首下部で折れておりセメントで矧ぎ付けている。風化が激しく古風に見える。江戸前期か、

③ 塔残欠

宝篋印塔相輪・塔笠2・五輪塔風空輪の4石がまとめてある。

④ 菩薩形残欠

五輪塔火輪を台石にして、立像の胴脚部、菩薩形頭部が重ねである。それぞれが違うもので、菩薩形は江戸後期頃か。

⑤ 童子形半迦像

像高34cm、半迦に組み裳をつけた脚部に、裸形の童子頭身部をセメントで矧ぎ付けている。両手で眼をかくし、頭を坊主につくってある。明治以後のものと思われるが姿体が珍しい。三申の猿像を意識してあるのだろうか。

⑥ 如来形浅欠

合掌する坐像で、首部を欠損。風化がはげしい。像高25cm、中央で横に割れている。

⑦ 羅漢倚像

像高55cm、厚手の衣をつけ、頭部は頭巾でつみ、膝上に経巻を開いている。像全体がL形につくられ、椅子にすわれるようになっている。や、風化が見られ、古く見える。祖師像・十王像ともとることが出きるが、一応羅漢像としておく。岩屋権現の羅漢像群との関係も想像されるが、不明である。室町～江戸初期の像か。作・大きさともこ、ではランクが高い。

⑧ 地蔵菩薩立像

像高47cm、塔の笠を台石にし、両手に宝珠を持った地蔵が立つ。左肩から斜めに割れている。明治以後の像。

⑨ 如来形坐像残欠

像高26cm、3ヶの五輪塔火輪を重ね、その上におく。膝部・頭部を欠損しており、手は弥陀の定印に結ぶ。新しい像（明治以後）であるが、素直な良作である。

#### ⑩ 塔残欠

自然石を台にして、五輪塔の火輪、風空輪を重ねる。三材とも別のものであるが、火輪がや・古い。

#### ⑪ 塔残欠

自然石の台上に、五輪塔の水輪をのぞき、重ねている。火輪はや・古い。

#### ⑫ 庚申塔

総高 229 cm、位牌形の塔で、供物台及び燈籠が付属している。4 又は 5 石の基礎石の上に立つ。台石・棹石（塔身）・唐破風をもつ笠・宝珠の各部から成っている。塔身に

「猿田彦太神（図版 6—4）

宝曆五乙亥年

「孟夏吉祥日」の銘がある。

台石には

「下鶴	権次	横居	清蔵
栗木野	惣吉	平○	新蔵
同所	清吉	同所	軍蔵
屋椎	伊七	平廻	孫左衛門
同所	林助	同所	又吉」

と奉納者銘がある。

#### ⑬ 奉納銘（図版 2—1）

岩盤の向って左側、阿弥陀堂の真後の位置に、縦48cm、横29cmの色紙形、深さ約 4 cmに掘りくぼめ、銘文が刻まれている。

「明治三十一歳

奉寄進

○月吉日

伊藤金郎」とある。

銘文の向って左側の岩壁がや・くぼんであり、又周辺を額縁状に掘り込んであり、岩について小祠があったことがわかる。この小祠が現在の堂建築以前の祭場であった可能性が強い。この銘は、その小祠の寄進銘であろう。

境内の石造遺品は、多くが破壊され、完存するものは少ない。五輪の火輪に古いものが確認される。室町初期頃からのものと考えられる。このような小五輪は、県内各地に見られるもので、小豪族が勢力をもっていた地域に多い。秋月氏・宝珠山氏との関係をうかがわせる。



1. 遺跡遠景



2. 遺跡近景



1. 「明治31歳」奉納銘



2. 岩壁下の石造遺品



1. 石造毘沙門天立像



2. 石造觀音坐像



1. 石造地藏菩薩坐像



2. 石造地藏菩薩坐像



1 : 石造觀音立像

2 : 石造如來形立像

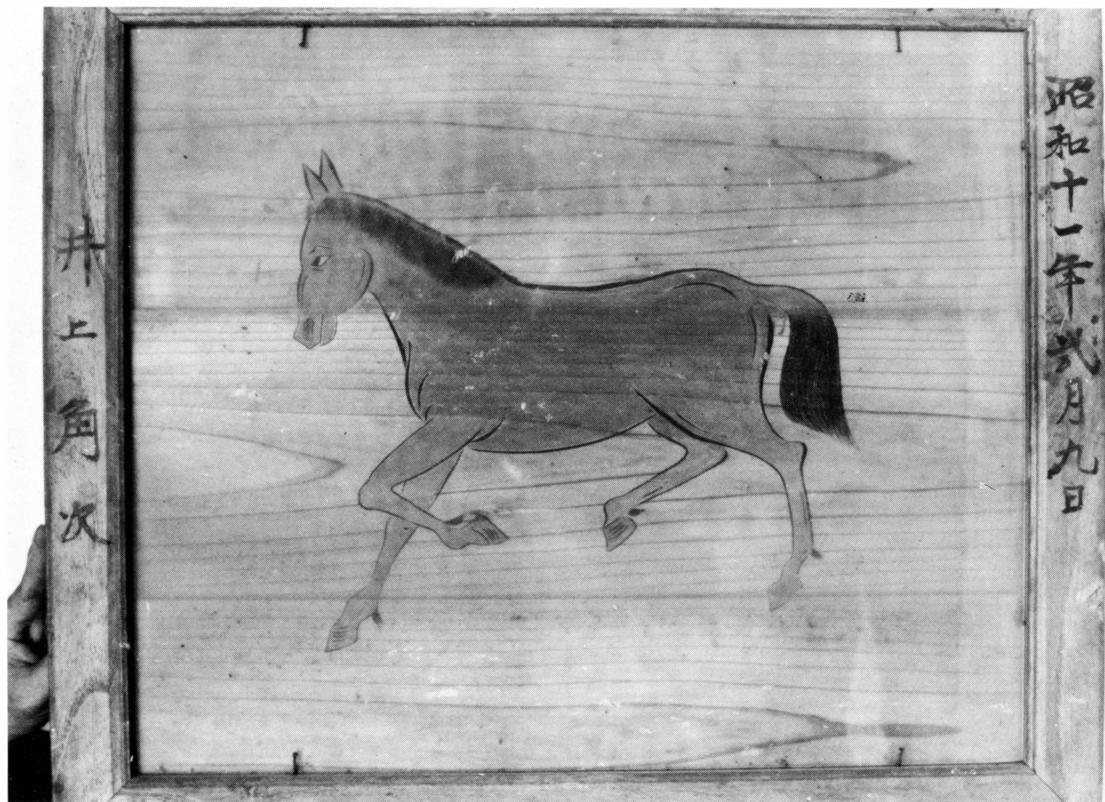
3 : 名號碑

4 : 猿田彥太神



奉  
納  
住勢參拜記念

1. 絵 馬



昭和十二年六月九日

井上角次

2. 絵 馬

福岡県文化財調査報告書

第 64 集

昭和57年3月31日

発行所 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷所 (有) 松古堂印刷

福岡市西区大字周船寺407